

沖縄考古学会

会 長：島袋 春美
編 集：宮城弘樹・崎原恒寿
横尾昌樹・安座間奈緒

〒901-2211 沖縄県宜野湾市宜野湾 2 丁目 6 番 1 号
沖縄国際大学社会文化学科（考古学研究室気付）
TEL098(893)9028(宮城研究室直通)
<http://nanto-ko-ko.org/>

南島考古だより

2023（令和 5）年度 沖縄考古学会総会並びに研究発表会開催される

去る7月30日（日）沖縄県立埋蔵文化財センターにおいて
沖縄考古学会総会並びに研究発表会を開催いたしました。

総会では、前年度決算及び新年度予算・事業計画の議案
の提出がなされ、賛成多数で承認されました。

総会に続き、研究発表会（テーマ：沖縄考古学50年の研
究成果と研究課題―沖縄考古学研究の進歩と発展に向けて
―）が開催されました。

今回は4人の報告者とそれぞれにコメントを用意して応
答する形で進行了ました。

最初に、新垣匠による「琉球列島における土器文化の起
源～復帰後50年の研究成果を中心に～」、奥平大貴「奄
美・沖縄諸島における縄文時代後・晩期（貝塚時代前4・
5期）の土器研究を振り返る」、具志堅清大「貝塚時代後
期研究の成果と課題―無文尖底系土器・貝交易研究を中心
に―」、與嶺友紀也「貝塚時代後2期からグスク時代初期
にかけての研究成果と課題」、金城りお、米須菜摘美、照
屋匠美「塩屋貝塚の貝類遺体における試み―これまでの研究
を踏まえて―」の報告をいただき、それぞれの報告に伊藤
圭、崎原恒寿、安座間充、新里亮人、島袋春美よりコメン
トをいただきました。また、下地安広、新里貴之によって
ディスカッションが行われました。

今回の参加者は会場60名、リモート20名の約80名でし
た。開催に際しまして、開催地である沖縄県立埋蔵文化財
センターのみなさんをはじめ、多くの会員の協力を頂きま
した。重ねて御礼申し上げるとともに、引き続き、会運営
へのご協力をお願いします。

議案第2号 令和3(2021)年度 沖縄考古学会 決算書

一般会計 収入の部				(単位:円)
項 目	予 算 額	決 算 額	増 減 額	備 考
会 費	170,000	152,000	△ 18,000	1,000円×142人 入会費10人分(10,000円)
機関誌等売上	550,000	356,830	△ 193,170	南島考古338,830円(送料込み) 資料集11,500円、合同学会資料集6,500円
繰 入 金	68,906	68,906	0	前年度よりの繰越金
寄 付 金	0	130,000	130,000	松竹謙氏・富貴嗣一氏より
雑 収 入	11,094	15,542	4,448	定例研究会資料代・預金利息等
合 計	800,000	723,278	△ 76,722	

支出の部					(単位:円)
項 目	予 算 額	予算現額	決 算 額	残 額	備 考
総会・会議費	10,000	10,000	0	10,000	
会 場 使 用 料	10,000	10,000	0	10,000	
印 刷 製 本 費	600,000	600,000	484,000	116,000	「南島考古」第42号 「南島考古だより」118～120号印刷
通 信 費	40,000	55,370	55,370	0	南島考古だより・南島考古郵送料
消 耗 品 費	20,000	20,000	0	20,000	文具類(消毒用品含む)
翻 訳 委 託 料	10,000	10,000	10,000	0	「南島考古」第42号翻訳
H P 運 営 費	20,000	20,000	18,600	1,400	HPサーバー利用代
繰 出 金	0	0	0	0	
予 備 費	20,000	20,000	6,600	13,400	花代
準 備 金	70,000	54,630	0	54,630	次年度事業の準備金 一部を通信費に流用
合 計	800,000	800,000	574,570	225,430	

収 入 額： 723,278 円
支 出 額： 574,570 円
差 引 額： 148,708 円

特別会計				(単位:円)
項 目	予 算 額	決算額	残額	備 考
積 立 金	244,000	0	244,000	記念事業等に関する費用
合 計	244,000	0	244,000	

令和5年7月30日
沖縄考古学会
会長 島袋 春美



総会受付の様子



ディスカッションの様子

研究発表会に引き続き、沖縄考古学会創設当時にご尽力いただきました安里嗣淳氏、金武正紀氏、當眞嗣一氏、知念勇氏（五十音順）をお招きして、事前に実施した沖縄復



左から安里氏、當眞氏、金武氏、知念氏

帰50周年記念座談会掲載の会誌を謹呈しました。座談会の様子は、「沖縄における考古学と文化財保護の草創期（前半）」と題して南島考古42号に掲載してあります。



研究発表会に参加した皆様

【ニュース】

池田榮史元副会長、第 82 回西日本文化賞受賞

公益財団法人西日本新聞文化財団が文化の日に合わせて贈る第82回「西日本文化賞」が令和5年10月3日に発表され、学術文化部門の正賞に元副会長（現・國學院大學研究開発推進機構教授）の池田榮史氏が選ばれました。

この賞は、西日本新聞社が九州・沖縄地域の文化、芸

術、芸能などで顕著な業績を上げた個人・団体を顕彰するものです。

今回の受賞は「歴史研究に新たな展望を開いた」とその功績が評価されたものです。

本会としても大変喜ばしいニュースです。

【遺跡紹介】

「奄美大島要塞跡」の調査成果

鼎さつき（瀬戸内町教育委員会）

はじめに

奄美大島要塞跡は、奄美大島と加計呂麻島に挟まれた大島海峡東西口を中心に構築された、旧陸軍の要塞跡である。瀬戸内町には明治期～第2次世界大戦終結期にかけ、旧陸軍・海軍により構築された、主に軍事に関する近代遺跡が数多く現存する。瀬戸内町では、平成26年度より調査を開始し、奄美大島要塞跡の内、「西古見砲台跡」、「安脚場砲台跡」、「手安弾薬本庫跡」の3遺跡が、『奄美大島要塞跡』として令和5年3月に国指定史跡となった。

奄美大島要塞跡とは

奄美大島要塞は近代日本の22要塞の内、17番目に構築された要塞である。海軍本拠地である大島海峡防備を目的とし、1921（大正10）年より砲台および関連施設の建設が開始された。砲台施設の建設は世界情勢に即した国防施策に

より断続的に継続された。奄美大島要塞司令部閉庁後は、海軍施設の拡充が図られ、終戦間際には海軍特攻作戦（震洋）基地が建設された。

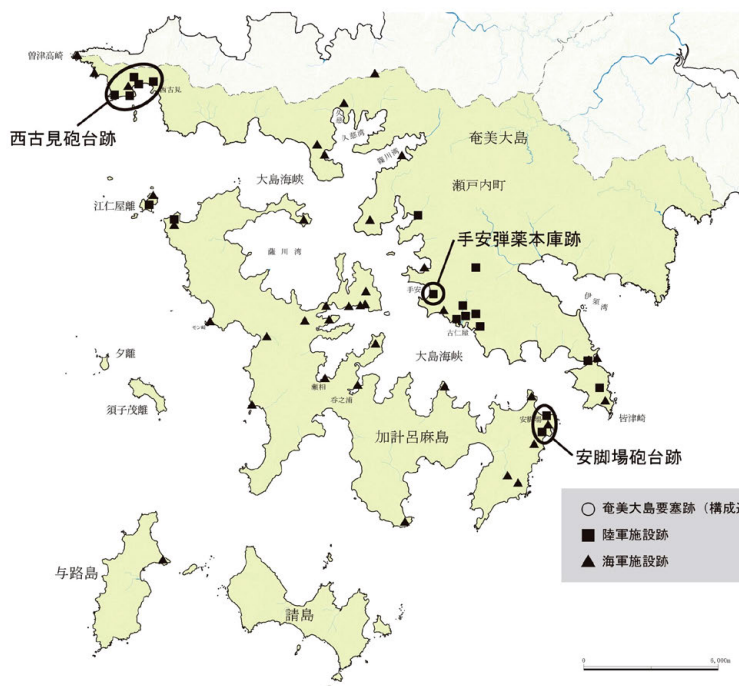


図1：奄美大島要塞跡および旧陸軍・海軍施設跡位置図

調査の経緯

瀬戸内町では平成26年度～平成28年度に町内遺跡分布調査を実施し、多くの近代遺跡（52遺跡）を確認した。その後、近代遺跡調査検討委員会を立ち上げ、考古学、近代史、軍事史、郷土史の専門家の助言を受け、16遺跡を選定し、内、特に重要な8遺跡を詳細調査対象遺跡として選定した。平成29年度～令和3年度には、8遺跡中、調査条件の整った6遺跡について遺跡詳細内容確認調査を実施した。以下、奄美大島要塞跡および旧海軍施設跡の内、国指定史跡となった3遺跡の説明を行う。

西古見砲台跡（写真1－①、②）

瀬戸内町西古見（奄美大島の西端）に所在する遺跡である。大島海峡西口より侵入する敵艦を阻止するため、1921（大正10）年に砲台建設が開始された。1940（昭和15）年に28糎榴弾砲が4基配備された。現在、砲座4基、砲側庫2基、砲台弾薬庫1基、観測所2基、給水施設跡などが残存する。

安脚場砲台跡（写真1－③）

瀬戸内町渡連（加計呂麻島の東端）に所在する遺跡である。1921（大正10）年に砲台建設が開始され、陸軍撤退後は海軍により使用された。大島海峡東口より侵入する敵艦（潜水艦）を阻止するため、海峡東口の海中に管制機雷を設置し、衛所で聴音、監視を行った。現在、陸軍建設の砲座4基、砲側庫2基、弾薬庫1基、旧海軍建設の衛所などが残存する。

手安弾薬本庫跡（写真1－④）

瀬戸内町手安（奄美大島側）に所在する遺跡である。1931（昭和6）年頃より、奄美大島要塞全砲台用の弾薬庫（火薬庫）として建設された。弾薬庫は3基建設され、いずれも「洞窟式」で、内部は2重構造である。第1弾薬庫は独立、第2および第3弾薬庫は連絡通路で連結する形状である。

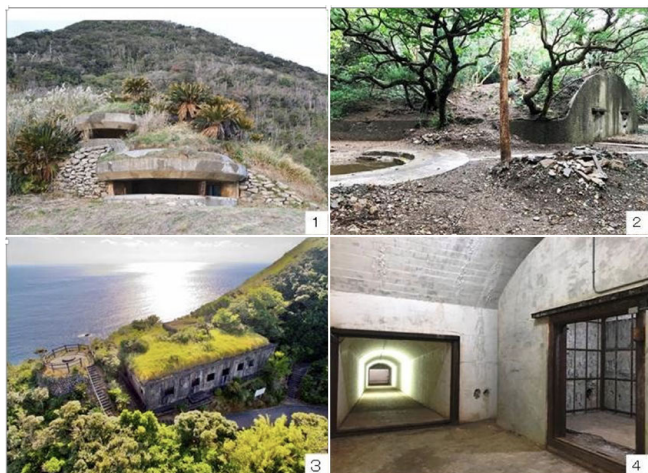


写真1：①西古見第2観測所跡 ②西古見砲台跡（第2砲座跡と砲側庫跡） ③安脚場砲台跡（衛所跡） ④手安弾薬本庫跡

その他の遺跡（国指定史跡3遺跡以外の選定13遺跡）

明治期：佐世保海軍軍需部大島支庫跡

大正期：奄美大島要塞司令部跡、実久砲台跡、江仁屋離砲台跡、皆津崎砲台跡

昭和期：海軍給水ダム跡、大島防備隊本部跡、第17震洋隊基地跡、第18震洋隊基地跡、先鼻砲台跡、与路砲台跡、須子茂砲台跡、待綱崎高角砲台跡

※アンダーラインは詳細内容確認調査を実施した遺跡

まとめ

調査の結果、奄美大島要塞跡はワシントン海軍軍縮会議や太平洋戦争開始など、近代日本の国防施策と密接に関連し構築された遺跡群であることが理解できた。

近代遺跡調査には様々な課題がある。瀬戸内町では、遺跡をより客観的かつ空間的に把握し、遺跡の持つ歴史的特性を抽出するため、①3次元計測など他分野の最新技術調査、②豊富な文献史料・画像資料調査などを積極的に取り入れ、課題解決を図った。

近代遺跡を残す取り組みは始まったばかりである。瀬戸内町では今後も近代遺跡調査を継続し、保存・活用を行っていききたい。

【参考文献】

瀬戸内町教育委員会 2017 『瀬戸内町の遺跡2』

瀬戸内町教育委員会 2022 『瀬戸内町の遺跡3』

**** 事務局より ****

■本会機関誌『南島考古』第43号を刊行予定しております。購入額については、ホームページで後日告知いたします。

郵送希望の場合は、別途送料実費が必要です。

振込先： 郵便局 01790-9-21851（沖縄考古学会）

■年会費（1,000円）も上記口座振込にて納入頂けます。

日ごろより本会運営に対しまして、ご支援・ご協力いただき厚く御礼申し上げます。私たちの活動は、会員の皆さまの会費で支えられております。

引き続き、会費の納入についてご協力方よろしくお願い申し上げます。なお、上記総会に不参加の会員様におかれましては、年会費（1,000円）を下記の口座振込にて納入いただければ幸いです。

また、本号より『南島考古だより』はデジタル版となり、HPへの掲載へと変更させていただきました。ご了承のほどよろしくお願い申し上げます。従来通り、印刷・発送をご希望の方はお問い合わせください。

振込先 郵便局 01790-9-21851（沖縄考古学会）

《文献一覧》

《報告書等》単行本(◎)、論文(○)で刊行年月順に掲載

※大隅、奄美、沖縄、先島諸島の順に掲載

- ◎宜野湾市教委『安仁屋・新城イシジャー流域古墓群喜友名山川原丘陵古墓群—令和元年度西普天間住宅地区土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査』2022. 9
- ◎南城市教委『根石グスク周辺遺跡—沖縄気象台糸数気象レーダ局舎建替工事に伴う発掘調査報告書—』2023. 2
- ◎宜野湾市教委『佐真下屋取古集落遺跡—令和元年佐真下ゲート前道路整備に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査』2023. 9
- ◎宜野湾市教委『赤道渡呂寒原古墓群・神山後原丘陵古墓群・宜野湾シリガーラ流域古墓群・宜野湾後原遺物散布地平成30年度・令和元年度市道宜野湾11号整備における埋蔵文化財発掘調査報告書』2023. 2
- ◎宜野湾市教委『西普天間住宅地区埋蔵文化財発掘調査報告書1—新城上殿遺跡、新城大道原第一遺跡、新城大道原第二遺跡、新城大道原第三遺跡—』2023. 3
- ◎宜野湾市教委『安仁屋・新城イシジャー流域古墓群—西普天間住宅地区公営墓地整備に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査』2023. 3
- ◎宜野湾市教委『宜野湾市内遺跡発掘調査の概要—令和23年度 発掘調査記録〔図録集〕』2023. 3
- ◎沖縄県立埋文セ『中城御殿跡—県営首里城公園中城御殿跡総括報告書—』2023. 3
- ◎沖縄県立埋文セ『基地内文化財10—確認調査報告書—喜友名東原第四遺跡・喜友名前原第三遺跡・喜友名東原第三遺跡』2023. 3
- ◎嘉手納町教委『嘉手納貝塚東遺跡—嘉手納公園再整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』2023. 3
- ◎南風原町教委『町内遺跡発掘調査報告書(I)—クニンド一遺跡・照屋前原遺物散布地・津嘉山古島遺跡・仲間村跡・新川森古墓群』2023. 3
- ◎名護市教委『安和与那川原遺跡2—安和与那川砂防事業に伴う安和与那川原遺跡緊急発掘調査報告書—』2023. 3
- ◎浦添市教委『当山東原遺跡3』2023. 3

《単行本・論文等》

- 松浦章「琉球国へ舶載された清代中国陶磁」『中近世陶磁器の考古学』第16巻 雄山閣 2022. 5
- Takamiya, Hiroto. Shinzato, Takayuki. Evolution of social complexity during the Shellmidden Period, the Central Ryukyus (Amami and Okinawa Archipelagos), Japan: Not simply simple, but not necessarily complex. The Journal of Island and Coastal Archaeology. Vol. 17 2022. 6
- 江上幹幸「沖縄の塩田形態—羽地内海屋我地島の調査を中心に—」『日本列島の人類史と製塩』季刊考古学別冊 38 雄山閣 2022. 8
- 安座間充・佐渡山理沙「やんばるの石灰窯考」『やんばる学研究会』第5号 やんばる学研究会 2022. 9

《論集・資料集等》

- ◎月刊海洋編集部『月刊海洋—サンゴ礁科学研究—多分野異文化融合の拠点へ(I)』〈通巻620号〉vol. 54, No. 7 2022. 7
- 石堂和博・松原信之「喜界島・種子島における裾礁型先史文化の様相」
- 高宮広土「奄美・沖縄諸島の先史人類学」
- 蔦谷匠・米田譲「琉球諸島におけるヒトの食性の変遷」
- ◎沖縄県立埋文セ『発掘調査ってどんなもの?』2022. 6
- ◎沖縄県立埋文セ『発掘調査速報2022』2022. 7
- ◎沖縄考古学会『南島考古』第41号 2022. 7
- 當眞嗣「ヒニグスクについて—その後の縄張り調査から—」
- 上原静「琉球列島におけるグスクの石垣刻印」
- 瀬戸哲也「グスクにおける3つの機能—グスク=集落説の再評価—」
- 山本正昭「グスク時代における石積み技術と高層化の相関性について—グスクに見られる段築状の石積みを中心に—」
- 久貝弥嗣「グスク時代から近世琉球期にかけての伊良部島における集落の変遷」
- 南勇輔「沖永良部島・与論島における城郭遺跡の検討」
- 坂井隆「陶磁資料から見た近世アジア海上交流—勝連グスク出土の銅貨をめぐって—」
- 盛本勲「奄美大島北部及び喜界島出土のジュゴン肋骨製サイコロ」
- 與嶺友紀也「グスク時代におけるくびれ平底土器の系譜」
- 横尾昌樹・米田穰「藪地洞穴遺跡出土遺物の年代」
- 新美倫子・玉城綾「新城下原第二遺跡出土のイノシシもブタなのか?—縄文時代早〜前期の沖縄型ブタ飼育パターン—」
- 木下尚子「「古座間味型」貝輪素材の登場—貝交易のエポック—」
- 島袋春美「供給地からみた貝交易—嘉門貝塚出土の貝殻集積—」
- 新里亮人「貝塚時代後期末の奄美諸島—グスク時代3点セット成立前夜—」
- ◎『季刊考古学』第161号 雄山閣 2022. 11
- 藤田祐樹・山崎真治「南の海—琉球列島」
- 海部陽介「実験航海プロジェクトを通じて理解したこと」
- 山崎真治「縄文時代の琉球列島における海洋進出と遠洋航海」
- 樋泉岳二「漁労証拠からみた縄文海洋進出史(琉球列島)」
- 片桐千亜紀「先島諸島」

※文献一覧は、2023年3月現在です。

※文献情報の遺漏にお気づきの場合は、だより担当まで情報提供をお願いいたします。(担当: 宮城・安座間・崎原・横尾)